

Building lifestyle around Ferrari

あれから10年、この先10年

2011年10月10日発売のNo.95で編集長に就任してから
今号でちょうど10年。光陰矢の如し。あっという間の10年であった。

本誌の編集長に就任してから、今号でちょうど10年となった。具体的には2011年10月10日に発売したNo.95からで、就任の経緯は当時の上司のちょっとした勘違いに始まるという、実は今もその詳細を書きにくい内容であるのだが、ここまで長く担当することになるとはもちろん夢にも思わなかった。当時はまだ隔月の10日発売で、中面を読み返すと作り方や雰囲気はだいぶ違っているものの、赤い地色にシルバーのロゴの表紙、そして有り難いことに黒い地色のリシャール・ミルさんの広告という組み合わせはブレずに変わっておらず、支えて頂いた皆さま、そして何よりご購入を続けている皆さまへ、この場をお借りして感謝申し上げたい。

2011年、38歳の私は、今思えばかなり迷っている時期だった。その年の8月に発売した清水草一さんのムック『年収200万円台から始めるフェラーリ購入計画EVO.2』を作った時に達成感がありすぎて、これ以上完成度の高いものを作るのは難しく、これで引退してもいいのではないかと思ったほどだ。それはスポーツ選手が現役引退を決意する瞬間とたぶんちょっと似ていて、新たなステップへと踏み出すことが求められていたのだと思う。そんなタイミングでの本誌編集長就任であった。だからその経緯はさて置き、当時の上司には今も感謝している。

No.95の特集はフランクフルト・ショーでのデビューを取材した458スパイダーだった。10年後となる今号に登場するのが296GTB、SF90ストラダーレというプラグインハイブリッド・フェラーリ……と時の流れを感じさせるのだが、取材舞台裏をテーマとしたNo.95の当コラム文末には『フェラーリとその周辺にあるフェラーリ・ライフの魅力を、それこそライブ感を持ってお伝えしたい』と書いていて、このあたりもブレて

いないと実感。コロナ禍において取材やそこまでに到る活動も制限されているが(特に後者が編集者にとっては命となり、その蓄積が減っていることに実はかなり危機感を覚えている)、今できるフルスイングは常にしているつもりだ。

あれから10年、その間にいいこともわるいこともたくさんあって、変わったこともたくさんあったが、今こうして振り返れば変わらないこともたくさんあった。この先10年も本誌が続いていくことを願いながら、ブレずにいきたいと思う。

さて今号の特集は久しぶりの"コンペティション"。ここまでレーシングカーのハードに寄せた特集は作った記憶がないので、10年で初めてかもしれない。一部を除きちゃんと取材を行った"ライブ感"ある記事を、今号もお楽しみ頂ければ幸いです。

10年前の当コラムで使用した、フランクフルト・ショー会場で撮った458スパイダーのスケールモデルとブースでリクエストした赤い飲み物。そして10年後、鈴鹿サーキットで撮った488GTE。

